



Title	ひとびとの想いが育てる博物館文化：札幌市博物館活動センターを例に
Author(s)	田中, 嘉寛
Citation	開発こうほう, 757, 31-34
Issue Date	2026-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100338
Type	journal article
File Information	no757_hokkaido.pdf



ひとびとの想いが育てる博物館文化 ー札幌市博物館活動センターを例にー



田中 嘉寛 (たなか よしひろ)

博士(古生物学) 札幌市博物館活動センター・学芸員

北海道大学総合博物館・資料部研究員 沼田町化石館・特別学芸員

ニュージーランド、オタゴ大学でイルカ化石を研究して博士号を取得しました。2024年から札幌市博物館活動センターの学芸員として勤務し、2025年にサッポロクジラの論文を出しました。古生物学と博物館学が専門。本稿でも紹介している資料活動、研究活動、交流活動という「博物館主要機能」を結合させる活動事例とその歴史に興味を持って、博物館学の研究を行っています(田中, 2025, 2026: 末尾参照)。

はじめに

前回は、サッポロクジラの発見、発掘、クリーニング、研究に関わられた方々の「活動」と、その活動に関わったおおぜいの方々の「想い」について紹介しました。化石の発見、発掘、クリーニング、研究と、おおぜいの方々が長い時間かけてとりくみ、ついにサッポロクジラは新種になり展示になって、さらにおおぜいの方々の目にふれるようになりました(図1)。

おもえば「これってすごい」ことです。「知りたい」「後世に残したい」「ひとびとに伝えたい」そう想い、

おおぜいの方々がサッポロクジラによりそってこれられました。

2026年5月30日にオープンしたばかりのサッポロクジラホールでは、実物のサッポロクジラの頭骨を常設展として見ることができます。また、サッポロクジラに関わった方々の「想い」をテーマとして活躍を紹介するパネルを展示しています(図2)。ぜひ、札幌市博物館活動センター(札幌市、豊平区)にいらしてください。



図1 サッポロクジラの復元画、前回ご紹介した北海道の足寄動物化石博物館の新村龍也学芸員の作。Cited from Tanaka et al. (2025) .



図2 サッポロクジラホール。札幌市博物館活動センターの展示

今回は、札幌市博物館活動センターのイチオシ化石を紹介しつつ、当センターを見にいらした方々の「想い」を読者のみなさんに紹介し「博物館文化」について広く考えてみたいと思います。

札幌市博物館活動センターの展示をみた方々の想い

おおぜい関わったサッポロクジラについて、研究の結果「世界一」の保存状態だということがわかりました（図3）。なにしろ、頭から腰のあたりまで連結した状態で見つかったのです。サッポロクジラがどの

ようなクジラなのか、これまで知られている化石種と比べていくうちに「あれ、サッポロクジラは化石として見つかった部分の多さで考えると、セミクジラ科としては世界一だぞ」と気がつきました。

実は、いままでセミクジラ科の化石はいくつか知られていますが、サッポロクジラほど良い保存状態のものはありませんでした。そのため、昔のセミクジラ科がどのような体つきだったかよくわかっていませんでしたが、サッポロクジラによって意外と細い体つきであったことが明らかになりました（図1）。現代のセミクジラ科とは大きな違いです。サッポロクジラについては私たちはさらに研究を進めており、セミクジラ科の進化についてもっと詳しいことがわかるようになると期待しています。

ところで、札幌市からはサッポロクジラだけでなく、サッポロカイギュウという7メートルクラスのカイギュウ化石も見つかっています（図4）。サッポロクジラは全長12.7メートルだったと考えています。そのようなことから、およそ900から800万年前の札幌市には巨大な海のは乳類たちがくらしていたこともわかつ

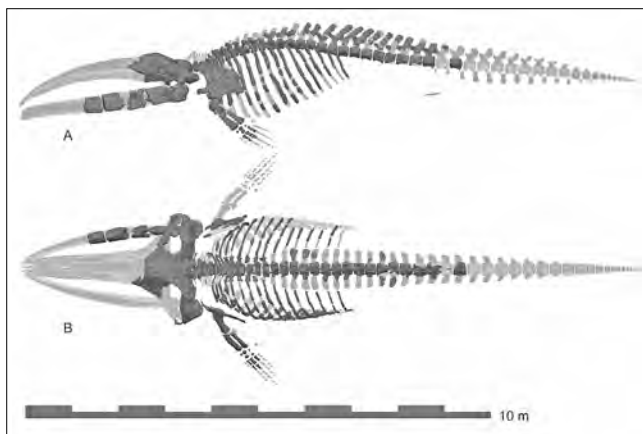


図3 サッポロクジラの保存部位（濃い色）を示す図。
Cited from Tanaka et al. (2025) .



図4 サッポロカイギュウの骨格。札幌市博物館活動センターで展示として見るすることができます

てきました。こんな大昔のこと、ふだんはあまり意識しないと思いますが、札幌市博物館活動センターでは実物の化石とともに、太古の札幌のことを想像し、楽しむことができます。

そんな札幌市博物館活動センターを見にいらした方々の「想い」をご紹介しますと思います。2024年に、札幌市博物館活動センターにメッセージボードという展示コーナーを設けました（図5）。見た目はただのホワイトボードとフセンなのですが「ひとびとの想いを形にしてくれる重要な仕組み」だと思っています。

札幌市博物館活動センターに来てくださった方々のメッセージを読むと、次のような「想い」があることに気がつきます。

- ・見たい、知りたい、理解したい
- ・その過程で得た感情の動きを誰かと共有したい
- ・心に刺激を得たい

ひとびとが成長し、健康な心を維持する上で良い刺激が必要とされています。札幌市博物館活動センターもそのような刺激を得る場となっていたらうれしいことだと思います。



図5 札幌市博物館活動センターのメッセージボード。当センターを訪れた方々の想いが形になっています

くらしのなかに博物館

ところで、文化という言葉には、広い意味と狭い意味など、さまざまな意味があります。ひとびとの日常生活における行動や判断の基準としての「文化」という言葉の使い方もあります。

私が思う「博物館文化」は「くらしのなか」に博物館があることです。「くらしのなかに博物館って、どんなかんじ?」と思われる方もいると思います。札幌市博物館活動センターに来てくださった方々のメッセージは、博物館のあるくらしを考える上で、深い洞察を与えてくれます。それは「見たい」「知りたい」「理解したい」「その過程で得た感情の動きを誰かと共有したい」「心に刺激を得たい」という想いでした。ここに現れる心の動きは、衣食住とはちょっと異なるものの、人間としての欲求といってもいいと思います。特に、心の刺激、あるいは心の栄養素といってもいいかもしれませんが、博物館でとりこむことができるのです。

ぜひ、通いやすく、ご自分にとって居心地の良い博物館を見つけ、足しげく通って見ることをおすすめします。博物館はスルメのように長くじっくり味わえます。同じ展示を何度見ても良いのです。見る側の心境が変わると、気がつくことも変わります。心に受けた刺激をじっくりと味わってみると、すでにくらしのなかに博物館があることでしょう。

博物館文化とは

このように考えてみると、博物館文化とは特別なことにかぎりません。週末どこに行こうかな?と思う行き先のなかに博物館が入っていると、文化的に豊かなくらしに博物館は欠かせない、と思う方々がいることが博物館文化があるということだと思います。そのようなひとびとの想いがあるこそ博物館文化が成り立つため、博物館文化は「モノ」や「場」だけでは成り立ちません。つまり、博物館文化を維持するためには、いくつかの要素をそろえていく必要があるのです。それらの要素のなかでも、博物館文化を維持し、成長

させるには、まず「想い」を持つ「人」が不可欠だと思います。

最後に、北海道の化石と博物館に興味を持っていたき、「ほっかいどう学」にシリーズを組んでくださった北海道開発協会に感謝します。本誌はオンラインで誰もがどこからでも読むことができますので、北海道だけでなく、日本や世界の博物館文化がさらに育つことにつながることを願っています。ぜひ、お近くの博物館に遊びに行ってみて、良いところを見つけて、友人・知人にオススメいただけたらと思います。クチコミの力は非常に強いものだと思います。この機会に博物館のあるくらしを通して、博物館文化を育てる仲間になっていただけたら、喜びもヒトシオです。

◆さらに興味のある方へ◆

サッポロクジラの研究や企画展に関わった北海道大学総合博物館のボランティアのみなさんの活動と想いについては、読み物として田中（2026a）でご紹介しています。沼田町化石館や足寄動物化石博物館など北海道にある古生物系ミュージアムの設立に関わった方々の想いについては論文として、田中（2026b）で紹介し学芸員と博物館の関わりについて考察しています。どちらもウェブ上で無料で読むことができます。

引用文献

- Tanaka, Y., Kimura, T., Shinmura, T., Ohira, H. and Furusawa, H., 2025: A new member of a large and archaic balaenid from the late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly fills a gap of right whale evolution. *Palaeontologia Electronica*. vol, 28(2):a37, p. 1–58.
- 田中嘉寛, 2026a: 企画展「クジラの化石」展を通してえた博物館文化の感覚. 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース. vol, 72, p. 5.
- 田中嘉寛, 2026b: ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたかー北海道の古生物系ミュージアムにおける脊椎動物化石発見と研究に注目してー. 今金地域研究. vol, 7, p. 1–14.